公益財団法人
ソニー教育財団

学校名	国本小学校	執筆者名	齋藤悠真
研究タイトル	都心から地球の土台を考える「森と人と水と、ともに」 『KUNIMOTO Gree∞een Project 2024/2025』		

育てるべき資質や能力・・・自分で設定した未来を担う子どもたちを育てるべき資質や能力について、その必要性を踏まえて記述する。（1 ページ程度）	
主に育成すべき資質/能力のキーワード	自主性、コミュニケーション能力、発信力、問題解決能力、行動力、探求力

VUCA（Volatility（変動性）、Uncertainty（不確実性）、Complexity（複雑性）、Ambiguity（曖昧性））の社会において、教育の在り方は大きな転換を求められている。このような変化の激しい社会を生き抜くため、子ども達は自分の力で人生や社会をより良くできるという実感を持ち、困難を乗り越える力、実社会での応用力や変化に対応する力、未来に向けて進む希望や意欲を身につける必要がある。

また、新学習指導要領では「社会に開かれた教育課程」を基盤としており、学校には社会との連携・協働を深めた教育活動の充実が求められていることも念頭にいれたい。

本校では、「持続可能な社会の創り手」の育成を目指し、以下の 3 つの点に力を入れている。まず、①探究学習と実体験を通じて学び、体験することで、子どもたちの興味・関心を育てるとともに、学習で得た知識を、実体験を通して深く理解させることに注力している。次に、②持続可能な社会を築くために、「自分達にできること」を子ども達自身で考えるための土台作りを大切にしている。さらに、③子ども達が自主的に考えた企画を企業や地域の方々と共に行い、自分達で情報を発信し、多くの人々の意識変容を促すプロジェクトを実施している。

今回の活動では、はじめに、子ども達が身近に感じる自然について、五感を使って学び、感じることに重きを置いた。多摩川の土手での植物採取、八ヶ岳での林業体験、世田谷区の市民緑地巡り、八王子市/町田市の里山体験と並行して、学習を進める。そこで、子ども達は環境問題のみならず、様々な課題に目を向け、持続可能な社会をつくるために「自分たちにできること」を考える。様々な課題を「ジブンゴト」として捉え、環境保全のためのプロジェクトを自分達で立ち上げ、実行する自主性を育てることを目的としている。また、「自分」「学校（友人）」「家庭（保護者）」「地域」「企業」とのつながりを体感し、その重要性を認識すること、多くの人を巻き込むためのコミュニケーション能力を身につけ、自ら発信する力を育てることも重要である。さらに、この活動を通して、子ども達の行動変容が、地域住民や他学年、保護者の意識変容を促し、気候変動対策の普及活動としても大きな意味を持つと考える。

このようなアプローチは、子ども達が社会とのつながりや自分自身の役割をより深く理解し、実際に行動を起こす力を育む重要な機会となる。未来を担う子ども達が、自らの考えで行動し、持続可能な社会の実現に向けて積極的に貢献することが求められる。

＜今回の活動の重点目標（育てたい資質や能力）＞

・教室での学習と実体験を並行して行うことで、自然や環境に関する知識を深め、持続可能な未来に向けた価値観を養う。
・教科を横断して多角的に物事を考える力を育てる。
・「自分達にできること」を自ら考え、実行できる自主性を育てる。
・多くの人々を巻き込むためのコミュニケーション能力を身につけ、発信力を育てる。
・企業の気候変動対策や脱炭素化の取組を学び、社会の動きを体感し、自分にできることを身に付ける。
・地域や企業と連携し、他学年や保護者、地域住民の意識変容を促す行動力を育てる。

初等教育の段階で、課題を発見し、自発的に行動できる子ども達を育成することが、持続可能な社会やウェルビーイングを目指す上で最も効果的であると考える。

子どもたちの現状・・・子どもたちの置かれている環境や状況、学習レベルなどを客観的に把握し、収集した確かな情報に基づき、子どもたちの現状について記述する。（1～2 ページ程度）

本校では校訓に「自然に対する素直さの寛容」を掲げており、学校行事や中庭、花壇、畑を通じて、子ども達の身近なところに木々や植物などの自然が常に存在している。1 年生では季節ごとに近隣の野川で自然観察会を行ったり、植物を栽培したりしている。中学年では、学習面での深みや行事での関連性を増やし、高学年では草木染めや林業体験を通じて、自然から命（色）を頂く学びを行っている。また、日々SDGs に関わる学習を進める中で、子ども達は世の中の現状を理解し、自分達の日常が多くの人やモノに支えられて成り立っていることを実感している。

昨年度、総合的な学習の時間で担当していた 5、6 年生 100 名を対象に、自然や環境、SDGs に関するアンケートを実施した。その結果は以下の通りである。

表 1　自然や環境、SDGs に関するアンケート結果（対象：2023 年度高学年：男子 64 名、女子 36 名）

Q 1　環境や自然、SDGs に興味あるか。 ・あ　る：98 名 ・な　い：1 名 ・わからない：1 名	Q2　下記の言葉の意味を知っていますか。 ・グリーンコンシューマー：78% ・カーボンニュートラル：32% ・サーキュラーエコノミー：56% ・緑　被　率：44%
Q3　自然や環境について、普段の生活の中で関わりがあるか。（学校行事を除く） ・かなりある：2% ・ある：9% ・ほどんとない：67% ・全くない：22%	Q4　学校行事や授業の中で自然や環境について深く考えることはどんな時か。（複数回答可） ・理科の授業：47 名　・総合的な学習：84 名 ・林間学校：67 名　・スキースクール：32 名 ・出張授業：92 名　・草木染め体験：98 名 ・朝の時間/休み時間/昼休み：44 名
Q5　環境のことを考えて、普段行っていることがあるか。 ・水や電気を大切に使う。 ・エコバックを使用している。 ・食べ物をできるだけ残さず食べる。 ・今はしっかりと勉強して、今後の環境問題について、自分ができることについて常に考える。	Q6　「環境や自然」と「SDGs」を結びつけるゴールはどれか。（複数回答可） ・ゴール 15（陸の豊かさも守ろう）：97 名 ・ゴール 14（海の豊かさを守ろう）：95 名 ・ゴール 13（気候変動に対策を）：86 名 ・ゴール 17（パートナーシップ）：78 名 ・ゴール 12（つくる責任つかう責任）：65 名
Q7　昨年度の 6 年生のプロジェクトに興味はあるか。 ・かなりある：78 名 ・ある：20 名 ・ほどんとない：2 名 ・全くない：0 名	Q8　昨年度の 6 年生のプロジェクトにはどんな魅力があったか。 ・有名な企業と共に活動していた。 ・自分達で一からプロジェクトを考えていた。 ・ICT 機器をたくさん使っていた。 ・学園や地域など多くの人を巻き込んでいた。
Q9　興味のある社会問題は？（複数回答可） ・環境問題：69 名　・ジェンダー平等：43 名　・フードロス問題：48 名　・少子高齢化：27 名 ・情報リテラシー問題：21 名　・いじめ問題：4 名	

アンケートの結果から、本校の子ども達は低学年の頃から SDGs 学習に取り組んでいるため、環境や SDGs に対する興味関心が非常に高いことがわかる。しかし、本校は都心に位置しており、幼少期を都会で過ごしてきた子ども達が多いため、自然は身近に存在するが、日常的な関わりが少ないのが現状である。また、Q7 および Q8 に関しては、ここ数年、6 年生が小学校 6 年間の集大成として、児童主導で課題解決型プロジェクトを実施しており、下級生は、「自分達の時には何をするのか、したいのか」を

常に考え、モチベーションを高めている。また、個人の探求学習も並行して行っており、Q9 からもわかるように、探求型学習で子ども達が最も関心を持つ社会問題は「環境問題」である。

教育支援の方針・・・子どもたちの現在の状況を踏まえ、過去の実践経験や知見（失敗）なども加えて、教育支援の方針を記述する。（2～3 ページ程度）

私はここ数年、本校の総合的な学習のカリキュラムデザインを担当し、その運営を主導している。年度によって子ども達の興味関心に応じてテーマを変え、計画を立てている。以下に、2022 年度の実践概要を示す。

--2022 年度の実践例----------

目　標：企業の取組を学び、知識を広げ、企業と協働的にプロジェクトを遂行すること。

・気候変動の現状を理解する。
・企業の気候変動対策に対する取組を学ぶ。
・自分達にできるプロジェクトを立案し、実行する。

図１．服のチカラプロジェクト

実践例：**プロジェクト例：服のチカラ/本のチカラプロジェクト**
（キャリア教育・金融教育）

不要になった子ども服や本学園の制服、古本を回収し、物の命を最大限に延ばすことを目指す。子ども服は企業や国際機関の協力を得て難民として苦しむ子ども達に送り、制服と古本は販売してその収益を寄付。売れ残った古本については、以下の 3 つの追加プロジェクトを実施。

・販売で売れ残った古本は大手リユース企業のクラウドファンディングプロジェクトに支援。
・低学年向け移動図書館として学内での利活用。
・古本を使用して紙すきやしおり作りを行う。

図２．文化祭にて回収、販売

このような企業を巻き込んだ 2022 年度の実践経験を踏まえ、今回の研究テーマである「森と人と水と、ともに」の教育支援方針を策定したい。ここ数年、SDGs 学習に注力してきたが、子ども達は知識習得に偏りがちである。そこで、自然や環境への意識が高まるよう、自分の目で見て、感じ、考え、表現する機会を増やすことが重要である。特に、普段の生活で自然と触れ合う機会が少ない都市部の子ども達には、自然や環境に特化した体験を提供し、本校での学びを深化させることが必要である。

今回の実践では以下の 5 点を教育支援方針とする。

＜子ども達がより主体的に活動できるためのサイクル＞

以前の実践では、「学習からの気づき→プロジェクトの実施」というワンサイクルで活動が進行していたため、子ども達の主体性が限定的であった。今回は「体験→学習→気づき→共有→それを活かした体験→学習→...」という教育スパイラルを導入し、活動の幅を広げる。これにより、子ども達の気づきや考えが経験を通じて発展的なものとなる。

＜【体験】知見を増やすための学習に多くの実体験を＞

インターネットや文献を通じて知識を得るだけでなく、自然に関わる体験を通して五感を使い、自ら感じたことを知識と結びつけることが重要である。教室での対話型学習や調べ学習も並行して行い、実体験と知識の習得をクロスさせることで、子ども達の発展的な考えや行動を評価する。

＜【知識・理解】自己表現力を高めるために教科横断的な学びを取り入れる＞

特定の教科に限定せず、一つの事象に対して多面的・多角的に物事を見る教科横断型の学びを行うことで、子ども達の意識を常に活動に向ける。

・図工：ICT 機器を利用したポスター/CM 制作、工作やデザイン。
・国語：テーマ授業ごとの感想シートや保護者向けの手紙作り、活動報告プレゼン。
・社会・理科：社会的問題の解析や理科的な実験・観察。
・算数：データや数値などの資料の読み取り。

図３．ICT 機器を使用したポスター制作

2022 年度の実践では、授業時数が予定時数を超過したため、今回は事前に余裕のある授業プランを計画する。

＜【気づき・共有】学年間や幼稚園、中高とのつながり＞

異年齢の世代と関わる機会を多く持つことで、異なる視点から物事を考える力を育てる。合同授業や協働プロジェクトを通じて、他の考えと自分達の考えを照らし合わせ、行動に移す力を養う。

・小学校他学年とともに商店街での告知活動。
・幼稚園年少組との「くにもと　えんにち」交流。
・中高等学校との告知活動や協働プロジェクト。
・低学年とのエコバッグ作り。

図４．「くにもと　えんにち」の様子

＜【気づき・共有】企業・NPO・行政とのかかわり方＞

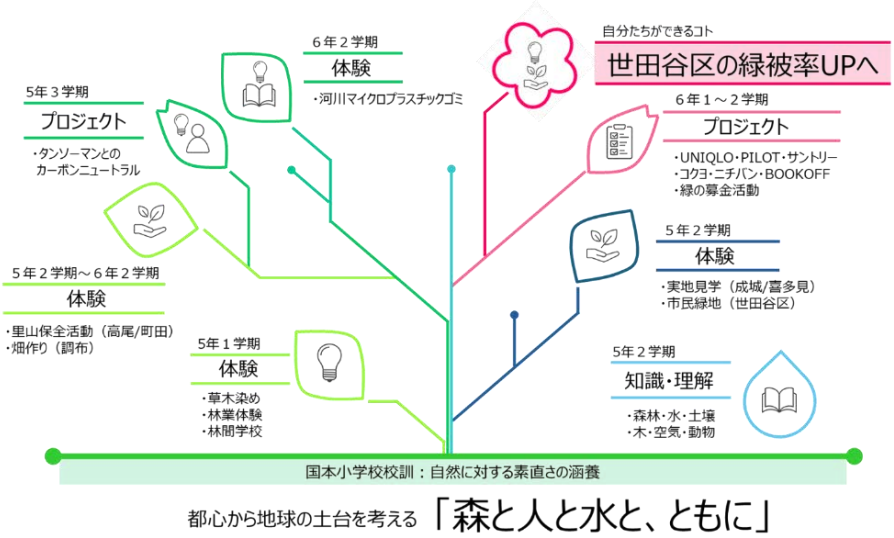
多くの企業や NPO、行政を巻き込むことで、社会のシステムを学び、プロジェクトへの関わり方や手順を学ぶことができる。子ども達は、実社会での経験を通じて考えを共有し、行動に繋げる力を養う。

以上の教育支援を行うことで、持続的かつ発展的な実践につながる。

＜今後に向けた持続性と発展性＞

本校をプロジェクトの実施拠点として、地元の小中学校や商店街、企業、大学、行政、NPO、メディアと協力・連携しながら、大きな循環サイクルを確立することを目指す。プロジェクトのテーマは子ども達の興味関心によって年度ごとに変更し（例：2024 年度 6 年「フードロス」、5 年「森林や緑地の再生」）、常に発展性を持たせる。活動の柱となる部分は継承しつつ、持続的な教育実践を行う。

＜KUNIMOTO Gree∞een Project 2025 教育イメージ図＞



実行計画と準備状況・・・「③教育支援の方針」をもとに、自分が「いつ、何を、どのように行うのか」を具体的な実践や行動に落とし込み、来年度以降の実行計画と準備状況を明確に記述する。（3～4 ページ程度）	
具体的な工夫のキーワード	持続可能な未来に向けた価値観、自主性の発揮、コミュニケーション能力/発信力/行動力の向上、地域や企業との連携、他教科との連動

2024/2025 年度　『KUNIMOTO Gree∞een Project 2024/2025』カリキュラム

研究での目標	・教室での学習と実体験を並行して行うことで、自然や環境に関する知識を深め、持続可能な未来に向けた価値観を養う。 ・教科を横断して多角的に物事を考える力を育てる。 ・「自分達にできること」を自ら考え、実行できる自主性を育てる。 ・多くの人々を巻き込むためのコミュニケーション能力を身につけ、発信力を養う。 ・企業の気候変動対策や脱炭素化の取組を学び、社会の動きを体感し、自分にできることを身に付ける。 ・地域や企業と連携し、児童、保護者、地域住民の意識変容を促す行動力を育てる。	
単元名	都心から地球の土台を考える「森と人と水と、ともに」 **『KUNIMOTO Gree∞een Project 2024/2025』**	
指導内容	①　自然に親しむ　＜草木染め、学校行事＞ ②　森林をテーマとした学習＋実地見学（東京都世田谷区喜多見/成城エリア） ③　自然環境体験　＜林業体験（長野県八ヶ岳）、里山体験（東京都町田市：七国山緑地保全地域/東京都八王子市：高尾の森自然学校）、田畑作り体験（東京都調布市） ④　企業とのカーボンニュートラルプロジェクト（タンソーマン、企業 6 社、本学園、地域商店街、地域住民）/緑の募金活動（国土緑化推進機構） ⑤　まとめ活動 → 学内/協力企業での活動報告/プレゼンテーション ⑥　『KUNIMOTO Gree∞een Project2024/2025』　＜植林活動/学校近隣の緑地整備・里山再生ボランティア、河川のマイクロプラスチックゴミ拾い実習（東京都荒川）＞	
年月	学習活動 （□：学習　■：体験　★：プロジェクト　●：評価）	教科との連携/ 他団体との準備調整
2024 年度 4 月	**<u>◎レディネスアンケートの実施</u>**<u>＜環境・自然について＞</u> 自分が「環境や自然」について、どれくらいの関わりや想いがあるかを見直し、これからの学習への見通しを立てる。 ・Earth Day ・自分にとっての環境・自然【気・共】	◎学びのサイクル 【体感：体】 【知識・理解：知】 【気づき：気】 【共有：共】
5 月	**<u>■ 草木染め体験</u>**<u>（本学園、多摩川土手）</u> 自然と触れ合うことで、親しみを持ち、草木が生み出す香りや色を感じ、自然の中で生きていることに感謝する。 ・学園の植物の剪定【体】 ・草木染めについて/歴史/染色家志村ふくみ先生（人間国宝）について学習【知・気】 ・多摩川土手での植物採集【体】 ・草木染め実習→まとめ→共有【体・気・共】 	<u>＜アトリエシムラ　染色家志村昌司先生　石澤知子先生　佐々木みちる先生＞</u> 草木染め実習：総合的な学習の時間 剪定：理科「植物の発芽」 多摩川土手での採集：理科 まとめ/共有：国語

	●植物の色や香りを味わい、植物から頂く命（色彩）に感謝の気持ちを持ち、染織の世界を理解する。	
6 月	**□ 学習「日本の森林」**【知・気・共】 草木染めを通して、自然や環境との距離が縮まったので、視野を大きく持ち、日本の森林の現状や問題について目を向ける。 ・日本の森林の現状と問題 ・国や農林水産省、林野庁の取組 ●日本の森林の現状と課題について関心を持っている。	学習：社会科 単元「わたしたちの生活と森林」
7 月	**■ 林業体験**（長野県八ヶ岳）【体・知・気・共】 日本の森林の現状や問題、林業の知識に経験を加え、深みを持たせるために林業体験（植樹体験）を行う。 ・森と木について ・林業とは？ ・林業で使う道具 ・植樹体験（タモの木）【体・気】 ●林業への関心を持ち、積極的に活動に取り組んでいる。活動を通して、林業の必要性を理解している。	長野県八ヶ岳中央農業実践大学校　校長:大杉立氏＞ 林業体験：総合的な学習
2024 年度 2 学期 9 月～ 10 月	**□学習「森林との結びつき」**【知・気・共】 林業体験で「森林」への関心が高まったところで、「森林」は多くの事柄と結びつき、支え合い、地球の土台になっていることを認識する。 ・森林と SDGs　　・森林と水 ・森林と土壌　　・森林と CO_2/O_2 ・里山と森林　　・森林と動植物 現状の関係性や課題について問題意識を持ち、その解決策についてもグループで話し合う。【気・共】 ●森林がもたらす恵みと関連性について関心を持っている。	学習：社会科 単元「わたしたちの生活と森林」 SDGs とのつながり/里山：総合的な学習 動植物、CO_2/O_2、土壌：理科
2024 年度 10 月	**■ 学校近隣での緑地フィールドワーク**（東京都世田谷区成城、喜多見）【体・気】 自分達の周りの「森林や緑地」がどのくらい存在するのか確かめる。また、保全のために多くの人が関わっていることを知る。 ・学校近隣の白地図に緑地の在処を想像させ、共有し、実際に確かめに行く。	＜一般財団法人　世田谷トラストまちづくりトラストみどり課　町田裕一朗氏 フィールドワーク：総合的な学習

	・実際の世田谷の緑地の様子や緑地保全に関わっている人々の様子を共有する。 ●世田谷区にある市民緑地の存在意義と行政の取組の必要性を理解する。	共有活動：国語　単元「グループで意見の共有をしよう」
2024 年度 10 月～ 2025 年度 6 月	■ 里山再生実習（東京都町田市/八王子市） 【体・知・気・共】 森林や生態系の保全のため人の手による森の整備の必要性に着目させる。オールシーズン関わることで、里山を再生・維持するには、多くの人々が関わっていることを実感する。 ・自然観察（絶滅危惧種/草木の観察/獣害について） ・雑木林の手入れ（下草刈り/外来種雑草の処理） ・農地の整備 ・樹木/竹の伐採 ●人と自然との共生について考え、その地域に密着した取組を考えて実行している。	東京都町田市：七国山緑地保全地域 ＜東京都環境公社　環境共生部東京都生物多様性推進センター　角田皓平氏/NPO 法人自然環境アカデミー　谷村春樹氏＞ 東京都八王子市：高尾の森自然学校 ＜セブンイレブン財団/NPO 法人 COLLECITVE 秋元平良代表理事＞ 里山実習：理科・総合的な学習
2024 年度 3 学期～ 2025 年度 11 月	■ 田畑作り体験（東京都調布市）【体・知・気・共】 里山再生での過程で田畑の整備や再生の重要性に気付く。そこで、農作業に関わる一連の作業を体験する。 ・農作業実習　（土作り、肥料の散布、播種、草刈り・防草作業などの管理、収穫の一連の作業体験 ・田起こし/代かき/田植え/草とり/稲刈り/はざかけ ●農作業を通して、土づくりから収穫まで一連の作業のそれぞれの意味合いを理解し、一つ一つの作業を丁寧に行なっている。	＜D.C.Farm　代表 相田直人氏＞ 田畑作り：総合的な学習
2024 年度 3 学期～ 2025 年度 1 学期	□ 学習「カーボンニュートラルについて」【知・気・共】 企業が取り組む「カーボンニュートラル」について学習することで、自分達の周りの CO_2排出に目を向けさせる。また、2 学期の学習の中で「森林と CO_2/O_2」の関係性に触れているので、6 年生で行うプロジェクトと結びつけられるようにする。 ・森林と CO_2との関係についての学習【知】 ・自分達の学校生活で排出している CO_2を企業の力で見える化（数値化）【気】 ・数多くの企業が取り組んでいるカーボンニュートラルの必要性について考える。【気・共】 ●自分達の課題と企業の取組を関連づけて、ジブンゴトとして考えることができる。	＜株式会社タンソーマン GX 福元惇ニ代表取締役社長＞ 学習（企業）：総合的な学習 学習（森林）：国語　単元「森へ」（光村図書） データ分析：算数　単元「資料の調べ方」
2025 年度 1 学期～ 2 学期	★ カーボンニュートラルプロジェクト with 企業 【体・知・気・共】 今までの経験から「自分達にしかできないこと」を考え、多くの人と協働しながら、目的を達成していく。	

	①生活用品の資源循環プロジェクト 本校を回収拠点とし、子ども服、古本、プラスチック製の文房具、テープの巻心を学園関係者や地域住民から集め、企業に返すという 3R＋Return=4R を行う。子ども服に関しては、UNIQLO 協力のもと、国連難民高等弁務官事務所を通して、世界の難民に届ける。 **②カーボンニュートラルプロジェクト** 2024 年度 3 学期の学習で測定した「学校生活で排出している CO_2」の量を基に自分達の生活用品の資源循環プロジェクトによって削減できる CO_2の量で相殺し、カーボンニュートラルを達成する。 **③子ども達発案の追加プロジェクト** 子ども達の話し合いの中で実行可能なプロジェクトは積極的に行う予定である。 EX）「くにもとえんにち」プロジェクト（国本幼稚園） 「多摩産材の利活用」プロジェクト （東京都産業労働局「東京の木・森の仕事」） 「緑の募金」活動（国土緑化推進機構） ※下記に想定のプロジェクト内容を記載 ●どのプロジェクトに対しても主体的に活動し、自分の責任を全うしようとしている。 ●グループで話し合い、プロジェクトに対し協働して取り組もうとしている。	①生活用品の資源循環プロジェクト ＜UNIQLO、コクヨ、BOOKOFF、ニチバン、PILOT、サントリー＞ ②カーボンニュートラルプロジェクト ＜タンソーマン GX＞ ③追加のプロジェクト EX）国本幼稚園 東京都産業労働局 「東京の木・森の仕事」 プロジェクト：総合的な学習/図工/国語/社会/算数 図工：ICT 機器を利用したポスターや CM 制作、工作やデザイン 国語：生徒・保護者向けの手紙作り、広報プレゼン 社会：社会的問題の解析 算数：データや数値などの資料の読み取り
2025 年度 3 学期	**★ 学習の総まとめ「世田谷区や本学園の緑被率 UP」プロジェクト　＜KUNIMOTO Gree∞een Project 2025＞** 【体・知・気・共】 ・自分達の取組と成果の活動報告を行う。 →学年・他学年向け、協力企業に訪問し、プレゼン ・今までの活動から世田谷区や本学園の緑被率 UP のために何ができるかを考え、提案・実行する。 →企業との植林活動 →河川でのマイクロプラスチックごみの回収 →世田谷の市民緑地での保全活動ボランティア →地域への感謝活動 →学園内のグリーンカーテンプロジェクト ●自分達の取組を伝わるようにまとめ、発表する。 ●活動から更なる課題について必要な情報を集め、自分達の考えをまとめようとしている。 ●身近な自然環境に興味・関心を持ち，将来的に自然と調和して生きるため に自分にできることは何かについて考えを深めることができる。	プレゼン：国語（ICT 機器での PowerPoint 作成） プレゼンの構成、方法、スピーチ力の構築 Project 提案・実行：総合的な学習

実施予定プロジェクトの詳細

＜生活用品の資源循環プロジェクト＞

「自分達の取組を通して、環境や自然、多くの人やモノを幸せに、また、身近な人を笑顔にする」ため、認知度の高い企業である 5 社（UNIQLO、BOOKOFF、コクヨ、PILOT、ニチバン）の協力を得て、生活用品の資源循を実施する。本校を回収拠点とし、子ども服、古本、プラスチック製の文房具、テープの巻心を学園関係者や地域住民から集め、企業に返すという 3R＋Return=4R を行う。子ども服に関しては、UNIQLO 協力のもと、国連難民高等弁務官事務所を通して、世界の難民に届ける予定。

＜カーボンニュートラルプロジェクト＞

株式会社タンソーマン GX の協力のもと、CO_2排出/削減の量を数値化。普段の学校生活で排出している CO_2の量と各プロジェクトで削減した実質的な CO_2の量を比べ、実質カーボンニュートラル状態または、更なるプロジェクトや植林活動を行うことで、カーボンポジティブを目指すプロジェクトである。

＜「くにもとえんにち」　プロジェクト＞

回収物を難民や企業に届ける前に、それらを使い、本学園の園児達を楽しませようと「くにもと　えんにち」というプロジェクト。回収物に手を加えず、またゴミが一切出ないよう、ゲームの内容を工夫し、園児達を笑顔にする取組を目標とする。企画書作りから、幼稚園へのネゴシエーション、本企画の準備、運営、片付けなど、すべて子ども達が責任を持って行う。不要になったモノに価値をつけ、さらに輝かせることのできるイベントであり、子ども達のアイデアとモノのチカラが多くの笑顔を生み出すことになるだろう。

＜「多摩産材の利活用」プロジェクト＞

東京都産業労働局「東京の木・森のしごと」の令和 6 年度の「多摩産材の利活用事業」の一環で多摩産材の端材を 2 箱頂いた。東京の森林から出た木材の端材の香りや手触りなど、五感で学べる学習教材として利用したい。

最後に…

今回の研究では、学習と体験の融合によって、子ども達のモチベーションをいかに上げ、持続していくかを念頭に 2 年間の継続したカリキュラムを推進していきたいと思う。そして、学習意欲の高い子ども達は様々な課題をジブンゴトとして捉え、解決するために自分達にしかできないプロジェクトを生み出し、数多くの企業や地元商店街、地域の方々を巻き込むだろう。企業との活動や子ども達自身がプロジェクトを発信推進していくことで、「社会と自分」がつながり、自分達の意思で行動することで、社会を支える力になれることを初等教育段階で実感することができる。国本小学校で学べたこと、自分達がやり遂げた成果を自信に、次のステップでも自発的に行動できる子ども達が増えれば、持続可能な社会やウェルビーイングに一歩でも二歩でも近づけるだろう。